

本人らしい制作重視

成田孝「障がい者アート」

書評者 山梨大学教育学部特任教授 廣瀬信雄

プロセス（過程）よりも結果（成果）が問われる時代、後の評価を想定しながら今の活動をする。いつの間にか、そのようなゆがんだ風が教育や福祉の世界にも吹き荒れている。

その子らしく、その人らしくあることを最も尊重し、大切に守り続けてきた学校の日々や作品発表にも「映え」の嵐が吹く。つまり出来栄ばかりに大人が気を取られていると、教師や指導員、研究者ら（成田は「スタッフ」と呼んでいる）が上から目線となり、その子たちやその人々を自分のために利用する間違いを犯す。そのことを著者は、「障がい者アート」を例にあげ、話を展開する。

本人たちの、本人による、本人のための…の「本人」が、別のことばに置き換えられていることに読者はハッ！とさせられ、やがて、このようなあさましい社会をより凝視していかなければならないと思ひ直す。障がい者は誰でも個性豊かな表現ができると思ひ込んでいる人もいる。安心できるスタッフ、優れた教育によってのみ、その瞬間に立ち合えるのだ。いずれにせよ「障がい者アート」は、見る者にも慎重さと判断力を要するものであることに読者は納得する。

「障がい者の展覧会」批評、スタッフの在り方論は圧巻だ。それは著者成田孝が長年にわたって自分自身で地域、領域を越えて多くの展覧会やそのスタッフ、そして制作者自身と丁寧に対話を続けてきたからであり、何より制作者を一人の人間として「リスペクト」してきた証しであろう。本人の作品が最も本人らしく制作されるように、力を尽くし続けた誠実な実践家のことばは圧倒的である。もっとも評者には「自分はいちいちこんなことは言語化したくない」という成田自身の声も聞こえてくるのだが…。

大変美しい表紙カバーに包まれたこの本は、それまで無関係に思えたり、まったく未開拓の分野に思えたりすることがらの中に、一つ一つの真実と歴史がすでに存在していることまで教えてくれる。新しいイベントをするための制作活動とか、ビジネスとしての教育活動は、それが成果主義と結びつくと誤りを正当化してしまう危険がある。

北方からのこの著作は、一個人による我流の社会批判ではない。それは21世紀の国際的な教育問題・福祉問題に目を向けたものであり、自らの実践に基づき、世界中の「スタッフ」に具体的方法を提供するものである。同時に本書は子ども、障害、教育とは、いったい何であるか、という根源的な問いへの明確な解答である。成田は言う。「重要なのは展覧会ではなく、障がい者の個性が豊かに発揮されるための日々の制作活動である」と。ひたすら授業実践を積み重ねてきた教師だけに授けられた至宝のフレーズである。

大人の軽薄な価値観で、「子ども」「障がい者」を囲もうとするから、さまざまな抵抗に遭うのである。その人から学び、その人を尊敬することなしに相互理解は成立しない。で

は、スタッフは何をしたらよいのか。本書には、そのカギとヒントがちりばめられている。  
評者はこの本を手放すことはないだろう（東奥日報 2019 年 7 月 25 日掲載分より引用）